

令和 3 年 6 月 6 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02713

研究課題名(和文)15世紀ロシアにおける言語文化と南スラヴの影響

研究課題名(英文) Culture, Language and the Second South Slavic Influence in the Fifteenth Century Russia

研究代表者

丸山 由紀子 (Maruyama, Yukiko)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・研究員

研究者番号：20401432

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：ロシアの歴史において、モスクワ大公国が台頭し「タタールのくびき」から脱していく15世紀は、言語、文化面においても大きな転換期であった。なかでも、宗教文献、写本装飾、ロシア教会スラヴ語が新たに南スラヴの影響を受けた。いわゆる「第二次南スラヴの影響」である。そしてこの時期、宗教文献作成において大いに活躍したのがセルビア出身の修道司祭パホーミイ・ロゴフェートである。本研究ではパホーミイの代表的な作品『ラドネシのセルギイ伝』の自筆写本の言語を分析し、セルビア語的要素とロシア語的要素の出現分布を明らかにした。また、同作品のロシア人修道士作成の写本と比較し、その言語的修正状況も調査した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでパホーミイ・セルブの言語的特徴については、主にロシアの修道士が作成した写本に基づいて論じられてきた。しかし、パホーミイ自筆の写本を調査することにより、パホーミイ自身が執筆の際に用いた言語はセルビア語色が極めて強いことが明らかになった。一方で、パホーミイはロシア教会スラヴ語に倣って書く努力をしていることも伺える。本研究ではこうしたパホーミイの言語的特徴を精緻に記述することにより、他の作品、写本の書き手をパホーミイと断定するための言語的判断基準を提供した。また、ロシアの修道士による言語修正状況をもとに、15世紀のロシア教会スラヴ語の規範意識を明らかにするための具体的な論拠を提示した。

研究成果の概要(英文)：The fifteenth century, when the principality of Muscovy was strengthening and the Mongol-Tatar domination gradually weakening, was a turning point for the history of Russian literary language and culture. One of the most noticeable changes is what is called the Second South Slavic influence - the strong influence of the South Slavic (especially Bulgarian) languages and literatures on the religious literature, the manuscript illumination and the Russian recension of Church Slavonic. In the period Pachomius Logothetes, a monk from Serbia, played an active role as a hagiographer. I analyzed the language features in Pachomius's masterpiece "the Life of Sergius of Radonezh", based on the author's manuscripts, and brought out the distributions of Russian and Serb elements. In addition, I compared Pachomius's manuscripts with the texts written by Russian scribes and examined their language amendments.

研究分野：ロシア語史

キーワード：15世紀ロシア ロシア教会スラヴ語 ロシア語史 パホーミイ・セルブ 第二次南スラヴの影響 中世セルビア語 中世ロシア語 ラドネシのセルギイ

1. 研究開始当初の背景

ロシアがモンゴルの支配から脱し、モスクワ大公国が台頭していく15世紀は、言語、文化、宗教活動においても大きな転換期であった。この分野では南スラヴ(主にブルガリア)の影響が強まり、「第二次南スラヴの影響」と呼ばれる現象が起きた。とくに影響を強く受けたのが言語、すなわちロシア教会スラヴ語であった。言語面における第二次南スラヴの影響に関してはこれまでも様々な研究がなされてきたが、中でも特筆すべきは M.G.ガリチェンコの研究である。彼女の研究により、この時期のロシア教会スラヴ語を検討する際の共通の基準が確立されたと言って良い。

第二次南スラヴ影響が北東ルーシ全域に波及しつつあった15世紀中葉、ノヴゴロドにセルビア出身の修道司祭パホーミイ・セルプが招かれた。以後、亡くなるまで(80年代以降)ルーシに留まったパホーミイは、有力者らの依頼により聖者伝を中心とした宗教文献を数多く著した。これまでパホーミイに関してはその文学、歴史的観点からの研究に比して言語研究は手薄であり、しかもそのほとんどはロシアの修道士が作成した写本が分析テキストとして用いていた。パホーミイ自筆の写本はすでに19世紀に発見され、現在も発見され続けている。しかし、そうした自筆写本を用いてパホーミイの言語が研究されることはほとんどなく、部分的に言及されるに過ぎなかった。

パホーミイの自筆写本にはこれまで指摘されてきた以上にセルビア語的要素が含まれている。こうした言語的特徴を明らかにすることは、パホーミイ研究に必須の基礎である。そして、このパホーミイの言語をロシアの書き手たちがどのように修正して写本を作成したか具体的に検討することは、第二次南スラヴの影響が最盛期を迎える15世紀中葉から後半におけるロシア教会スラヴ語の担い手たちの規範意識を探る、極めて有効な方法であると考えたのが、研究の動機である。

2. 研究の目的

- 1) パホーミイの自筆写本に基づき、その言語的特徴を網羅的に記述する。
- 2) パホーミイの自筆写本とロシアの書き手が作成した写本を比較し、その違いを明らかにする。
- 3) ロシアの書き手による言語修正を元に、第二次南スラヴの影響を経た当時、規範的なロシア教会スラヴ語はどのようなものであると認識されていたか、実例をもって明らかにする。
- 4) パホーミイとロシアの書き手、それぞれの役割分担を言語面から考察することで、ロシアの一大文化拠点である修道院内での作品・写本制作活動の一端を明らかにする。

3. 研究の方法

パホーミイの代表作『ラドネシのセルギイ伝』を分析対象とする。これは他の作品に比べると大部であり、自筆写本の分量も多く、豊富なデータを得られる。

また、ロシアの書き手が作成した同内容、成立時期もほぼ同じ写本の言語を比較する。

4. 研究成果

パホーミイの自筆写本とロシアの書き手が作成した写本の言語の違いの大半は、ロシア語とセルビア語の音声・綴りの違いに由来する。この領域における典型的なロシア語法、セルビア語法は以下の通りである。

スラヴ祖語	弱化母音 *i, *ü	*y	鼻母音 *ę	子音間の弱化母音 + 流音
中世ロシア語での表記	,		Ѧ, ѧ	弱化母音 / 母音 o, e + 流音
中世セルビア語での表記				流音 + 弱化母音

パホーミイの自筆写本はこれらのセルビア語法が随所で現れる。しかし、可能性がある位置であれば常にセルビア語式に綴られているわけではない。同時に、ロシア語に特徴的な表記も散見され、その出現頻度は語幹よりも語尾の方が高い。個々に覚え、習得しなければならない語幹よりも、規則性がある語尾の方が使用は容易であり、パホーミイは可能な限りロシア語法を用い、ロシア教会スラヴ語の規範に適う言語で書く努力をしていることが伺える。ただし、スラヴ祖語における子音間の弱化母音 + 流音に対応する綴りから、それは、第二次南スラヴの影響以前のロシア教会スラヴ語であったと推測される。

一方、ロシアの書き手はセルビア語式の綴りは徹底的に排除している。また、パホーミイが用いたロシア語式の綴りも、第二次南スラヴの影響を経たロシア教会スラヴ語に合わない場合は修正が施されている。ここに、当時、ロシアの書き手が規範と認識していた綴りが明確に見取れる。なお、形態レベルの修正も多く見られるが、統語、語彙における修正はほとんどない。

パホーミイが著した聖者伝が用いた内容形式は、その後の時代の聖者伝にとって見本となった。ロシアにおける教会文献制作において、パホーミイに求められたのは作品内容であり、言語

についてはロシアの書き手が修正することが前提となっていたと考えられる。ここに、ロシアの修道院内における南スラヴ出身者とロシアの修道士たちの共同作業の実態を見ることが出来る。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名	4. 巻 1
2. 論文標題 2. ()	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名	6. 最初と最後の頁 128-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三浦清美・丸山由紀子	4. 巻 9
2. 論文標題 『ラドネジのセルゲイ伝』 解題と翻訳 (1)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 エクフラシスーヨーロッパ文化研究ー	6. 最初と最後の頁 31 - 67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 丸山由紀子	4. 巻 17
2. 論文標題 14世紀末 - 15世紀モスクワ・ルーシにおける第二次南スラヴの影響 - ロシアにおける18世紀以降の文字改革に関連してー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本18世紀ロシア研究会年報	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名	
2. 発表標題	XV
3. 学会等名 The 10th East Asian Conference of Slavic Eurasian Studies (国際学会)	
4. 発表年 2019年	

1. 発表者名
2. 発表標題
3. 学会等名 X .(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丸山 由紀子
2. 発表標題 パホーミイ・セルプ(ロゴフェート)直筆写本における言語的特徴に関して 『ラドネシのセルギイ伝』を資料として
3. 学会等名 日本ロシア文学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 丸山由紀子(「ロシア語の歴史」の項目執筆)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 886
3. 書名 ロシア文化事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関